

『哀愁的東京』

重松清

光文社／2003年／1500円＋税

ケアフルな一冊

懐かしさと哀しみと……

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

このところ、難しい本が読めなくて（読みたい本はたくさんあるのだけれど、読み始めるとすぐにウトウトしてしまうので、最後まで読めないという悲しい現実。でも、だからこそ本書とも出会えたのだから嬉しいことでもあるのだけれど）、あんなに好きだった推理小説さえ、海外のものは名前が覚えられなくてだめ。漫画もよいのだけれど、これはすぐに読み終わってしまうので、通勤時間を考えると4～5冊持ち歩かなくてはならないから、重くなって大変。というわけで、読む本が限られてきて、ほんとうに久しぶりに文芸書を何冊か読んだ。これはそのうちの1冊。

帯封には「これが——僕が出会い、見送ってきた『東京』。」「生きる哀しみを引き受けたおとなのための“絵のない絵本”」とある。書かれているのは、一昔前の東京、華やかに生きていた人々、忘れがたい青春時代、そして時の流れ……。

主人公は、1963年生まれという著者と重なって見える41歳のフリーライターさん。いや、本業は絵本作家なのだけれど、2年前に書いた絵本をめぐる事件（その事件についてももちろんちゃんと書いてある）をきっかけに絵本を書けなくなって、今やどちらが本業かわからなくなっているライターさん。絵本の編集者から「書いてくださいよ」といわれながら絵本は書けず、インタビューの相手から「フリーライター

なんか。便利にこき使われて、結局は使い捨てみたいなものだ」「それでもやるのか」「もし、クズのようなスキャンダル記事の仕事が来たら断るのか」といわれ、「いえ……なんでもやりますよ」と答えるフリーライターの「プロ」。

「覗き部屋」「遊園地」「アイドルグループ」「モーテル」「歌謡曲」「テレビ」「自分という落し物」「SMの女王」。これはそれぞれの章に出てくる東京のあるいは日本のひとつの姿（著者が名づけたわけではない。私が勝手に感じたものだ）。

でも、語られるのは人と人とのつながり。覗き部屋の看板女優は40歳を過ぎて、「乳房はだらんと横にひしゃげ、おなかは何段にも分かれて、重たげに揺れる」「四十歳の現実が、ここにあった。十八歳の頃にはもう戻れないんだという現実が、確かに、どうしようもなく、あった」。しかし、主人公は「入ったことないんでしょ？覗き部屋なんて」と聞かれて「……いまなら通うかもしれない」「四十歳のおばさんのほうが、いいな」と答える。どうしようもない切なさ、寂しさと、底に流れる暖かさ。不覚にも、私は何度か文字がかすんでしまったのだった。

「宝くじはよお、買わなきゃ当たんねえかな、ほんと。買えるうちは、無駄でも買っといたほうがいいぞ。歳とってからだと、もう買おうと思っても買えなくなるからなあ」「夢見るのと目指すのとはちがうんだよな」。難しいな。夢は目指したら夢ではなくなるし……。

ところで、「ぼう」と読む漢字を書いてくださいといわれたら、あなたはどの字を書くだろうか？ 答えは、第7章にある。

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。